

国内研修成果報告書

JK 産業にみる性モラルについて

・・・「6 人に一人、アメリカじゃ 4 人に一人」

これを聞いて、何を思い浮かべるだろうか。幸せを感じている人の割合だろうか、それともある病気にかかる人間の数だろうか。残念なことに、これは性被害を受けたことのある女性の割合である。

今、私たち 10 代の女性を取り囲む環境は、社会を巻き込んで大きく変化している。帰る家、食生活、またファッションの流行など、衣食住を根底とした様々な環境が彼女らに刺激を与え、そして自らに柔軟に取り込んでゆこうとする 10 代特徴のそれは今、一部の悪意ある大人たちに注目され、侵食され、そして大事な何かを奪われる。そんなことが、今まさに、リアルタイムでこの国で起こっていることをご存知だろうか。約半年前の 2014 年 6 月には、米商務省の年次報告書において「JK お散歩」が日本の新たな人身売買の例として示された。この国の性モラルについて、今や国内にとどまらず世界中で取り沙汰される問題にまで成長してしまったのだ。

こうしたことを皮切りに、今では一般に広く知れ渡った「JK 産業」という言葉について注目したい。

JK 産業といっても、いくつかのカテゴリーに分けられ、「JK リフレ」や「JK 撮影会」のような個室ではなく、女子高生と一緒に散歩ができるという触れ込み（事実上の店外デート）で二人きりやカラオケや満喫などに行くサービスの「JK お散歩」という新たな業態の店が誕生している。今回はこれを中心として研修を行った。これも「JK リフレ」「JK 撮影会」と同様に風俗営業法の適応が受けないとされているため、本物の女子高生や 18 歳未満の少女が従事しており、児童買春等の犯罪の温床になっていることや路上での強引な客引き行為が問題視されている。2013 年 4 月以降は警察は「JK リフレ」「JK 撮影会」「JK お散歩」等の「JK 産業」に従事している 17 歳以下の女性従業員についてを補導の対象とし、2014 年 12 月以降は 18 歳の女子高生である従業員についても補導の対象と規定を加えた。このように「JK 産業」は業態を変えた上で店が営業を続け、警察とのいたちごっこが続いているという状態である。少女が自分自身を売り物にすることは、心身に有害な影響を与えるであろう。法律を駆使し取り締まろうとしているが、「実態はつかみにくい」と警察は今のところ手出しができないのである。

摘発によく使われる労働基準法の「年少者の有害業務」は主に危険な機械や薬品を使う仕事を念頭に、年少の労働者を守るための規定であり「お散歩」などを「有害」と断定できるかどうか問題になりやすく、JK 産業の横行に歯止めをかける決め手は、見あたらないのが実情だ。

また、そういった系列の店は取締役が同一人物で、店で働く女子高生のそばに寄り添い、あたかも善良な保護者であるかのような行まいで常に操れる状態にしており、その女子高生が店を辞めそうになると新しい店を紹介しそこで働かせるといったことがあると知った。何よりも驚きなのが、そのすべてが店側の思惑通りであるということだ。女子高生の見えないところで自らは操られ、暴力団などの資金源としてガツポリお金だけは搾取されるというこのシステムである。残酷である上に悪意がこもっており、しかし巧妙で一般社会に生きている上ではこの仕組みに気づくことすら容易ではないだろう。事実私も研修でこのことを知るまでそういった裏社会の資金源になっていることなど、知らなかった。

次に、店で働く女子高生の環境要因などを考察してみる。店にバテてクビになることや他の女の子に「そういうことをする子なんだ」という目で見られることは極度に恐れているのに、客のことは一切恐れていない。周りで起きていることを自分と重ねられないのか、あるいは重ねたくなくて、違うと思込もうとしているのか。普通のバイトではない、危ないことかもしれない、と思いつつもなかなかやめられず「うちのお店は関係ないから大丈夫」「お客さんは自分で選べるから大丈夫」と思っている子も大勢いると分かった。

しかし、ただ単に女子高生の無知さや危機感のなさを責めるわけにはいかず、それを教えてこなかったのは周りの大人たちでもあるということ忘れてはならない。なかには、親公認でお散歩をしているという子もいるというが、親たちは子どもから「観光案内のバイト」「お客さんとご飯を食べる仕事だ」と言われ、それを信じてしまっているのだ。無知なのは、大人も同じだろうと思う。

「なんで、こんなところで働いちゃうのかねえ」。少女たちの行動に対して、こうした疑問を持つ人は多いが、それを利用する男性や店側に対して「なんで客の男たちは、こんなところで女子高生を買うんだ」と疑問に思う人はほとんどいないだろう。むしろ「男はそういう生き物だから」の一言で片付けられ、批判は店とそこで働く少女たちだけに向けられる。だが、利用する男性客がいなければ、JK産業は成立しないのだ。JK産業が一般化し、知らず知らずのうちに足を踏み入れてしまっていた女子高生たちがいるように、そうとは知らず、「健全なお店」として利用したつもりが、買春する側になっていたという男性もいる。そうならないためにも、まずは多くの人々がJK産業についても知るべきだろう。

もはや、これは少女たちだけの問題ではない。本書でも指摘されているように、本当に変わるべきは、少女たちをJK産業に走らせている大人たちだと思う。

研修の事前に仁藤夢乃氏の「女子高生の裏社会」を読んだが、実際に秋葉原や新宿歌舞伎町を回ってJK産業をはじめとする女子高生を取り巻く社会の現状を目の当たりにすると、本当に言葉を失うとはこのことか、というほどの衝撃を受けた。

同じ十代の女性としてこの事態を重く受け止め、また私たちの知る限りの全てを大人たちにも知ってほしい。見て見ぬふりをする親世代も、救いの手を差し伸べる方法は考えればいくらでも出てくる。接し方、関わり方がわからないのなら私が今回お世話になったNPO法人colaboさんに協力をお願いするべきだ。私自身、JK産業に深い興味、関心があったためこのような現場に触れる機会があっただけで、普段の生活にはもうすでに馴染みすぎて目を凝らさないと見えない汚れのような、どこかそういった印象があると感じている。

買春というふうに考えていくと、少女たちは最初はお散歩という優しい言葉を使って、日常的なそういう行為をすればいいのだと思ってしまっただろう。手をつないだらいくら、腕を組んでいくら、添い寝していくらというように限りなく細分化し、行き着く先は性行為にまで至るというのに。そのことについて、ハッキリと拒否できる女の子はいいが、密室で行われている話で、拒否できない女の子たちだけだっているだろう。女子高生とお客さんとの間には絶対的に対照的な差があり、お客さんは物理的にも経済的にも力があるのだ。女子高生は非力である。その中で性暴力が振るわれた場合に彼女たちは、それは被害なんだと認識できないし、認識したとしても訴えることもできない。そういった性被害を受けた人たちが、今はJK産業といわれているが、援助交際や、その前の時代には売春などという形で、若い女の子たちが性的な商

品の搾取の対象にされているのである。20代、30代、40代、50代、60代になってもまだ、その
ときの傷を引きずることになるのだからもっと自分を大切に、と言いたい